お姉ちゃんといわれて

小川未明

青空文庫

光子さんが、学校へいこうとすると、近所のおばあさんが、赤ちゃんをおぶって、日の当たる道の上に立っていました。

「お姉ちゃん、いまいらっしゃるの。」と、おばあさんは、声をかけました。

光子さんは、にっこりとしたが、そのまま下を向いて、だまっていってしまいました。

「わたし、お姉ちゃんでないわ。」と、光子さんは、つぶやきました。

あんなにたのんでも、赤ちゃんを、だっこさしてくれないのに、なんでお姉ちゃんと、いうのだろう。私は、お姉ちゃんといわれても、ちっともうれしいことはないわと、光子さんは、道を歩きながら、思いました。

そして、おばあさんが、いじわるのような気がして、ていねいにあいさつする気にもなれなかったけれども、赤ちゃんは、かわいらしくて、ほんとうに、あのほおずきのような、ほおをぷっと吹いてやりたくなったのでした。

「どうして、私に、赤ちゃんをだっこさしてくれないのでしょう。」

ある日、おばあさんは、光子さんのお母さんに向かって、

「このごろ、お光ちゃんは、なにかお気にさわったことがあるとみえて、怒っていらっしゃるのですよ。いくら考えても、なにがお気にさわったかわかりませんが、どうかお母さんから、きいてみてくださいませんか。」と、たのみました。

こういわれたので、お母さんは、びっくりして、

「まあ、そんなことがあったのですか、それは、なにかおばあさんの、お考えちがいで、ありませんか。しかし、あんなおてんばですから、もし失礼をしましたら、どうぞごめんくださいまし。」と、おわびなさいました。

「いえ、そんなつもりで、いったのでないのですよ。私に気がつきませんから、なにを怒っていらっしゃるのか、お光ちゃんに、おききしてもらいたいのです。こないだも、お姉ちゃんと声をかけますと、下を向いて、にげていって、おしまいなさるのです。きっとなにか怒っていらっしゃるに、ちがいありません。」と、子供の心がわからぬまま、おばあさんは、母親にきいてもらうよう、笑いながらたのんだのでした。

「まあ、そんなまねを、光子がしたのでございますか。」と、お母さんは、顔を赤くして、おばあさんに、きまりのわるい思いをなさいました。

「いいえ、けっして、お光ちゃんをしからんでください。自分に、わけが思い出せないから、おききしたのです。」と、おばあさんも、とがめるつもりで、いったのでないと、恐縮しました。

お母さんと、おばあさんの、二人は、たがいに心がわかると、へだてなく、笑いながら、世間の話などして、別れたのでした。

お母さんは、家へ帰って、さっそく、光子さんを自分のそばへ呼びました。そして、おばあ

さんに対して、どうして、そんな失礼な態度をしたのかと、おききになりました。

光子さんは、しばらく下を向いて、だまっていましたが、

「早く、おいいなさい。」と、お母さんに、うながされると、あのときのことを思い出して、つい悲しくなり、目から涙を落としながら、

「私、お姉ちゃんでないんですもの。」と、答えました。

「赤ちゃんから見れば、あなたは、やはりお姉さんでしょう。」と、お母さんは、これにはなにか理由があると、察せられて、やさしく、いわれました。

「わたし、お姉ちゃんなら、すこしばかり赤ちゃんを、だっこさしてくれたっていいでしょう。それなのに、いくらおばあさんに、おねがいしても、赤ちゃんを抱かしてくれないのですもの。」と、さもうらめしそうに、泣きながら、母親に、訴えたのでした。

お母さんは、光子さんが、赤ちゃんをだっこしたいばかりに、じれているのだとさとると、むしろ、その子供らしい、やさしい心をば、いじらしく思いました。

「ああ、そうだったの。ほんとうに、おまえさんも、赤ちゃんなのね。」と、いって、笑われました。

その後、このことを、お母さんは、おばあさんに話されたのであります。すると、おばあさんも、急に明るい顔つきとなって、

「ああ、そうでしたか、私が、わるかったのです。ただあぶないと思って、いくたびも光ちゃ

んが、抱かしてくれとおっしゃったのをだかさなくて、わるいことをしました。それで、よくわかりました。こんど、おんぶしてもらいましょうね。」と、いって、おばあさんも目がしらに、涙をためていられました。

その翌日でした。おばあさんは、外で遊んでいた光子さんを呼んで、

「さあ、赤ちゃんをおんぶしてくださいね。なかなか重いから、だっこは無理です。いま、ひもをかけますから、おんぶしてくださいよ。」と、いって、光子さんの、小さな背中へ、赤ちゃんをおんぶさしてくださいました。

はじめて、赤ちゃんをおぶって、光子さんは大喜びでした。

日かげにいては、赤ちゃんが、寒いので、日のよくあたる往来へ出ると、赤ちゃんはうれしがって、おくん、おくんといって、おどり上がりました。そのたびに、力があまって、光子さんは、ころびそうになるのを、危うくこらえました。

「まあ、なんて元気のいい、強い赤ちゃんでしょう。」と、光子さんは、うれしかったのでした。そして、もし、おばあさんが、ひもでおぶわしてくれなかったら、落としてしまったかもしれぬと思い、そんなことに気のつかなかった、自分のわがままを、はじめて、わるかったと、さとったのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　14」講談社
　1977（昭和52）年12月10日第1刷発行
　1983（昭和58）年1月19日第5刷発行
底本の親本：「太陽と星の下」あかね書房
　1952（昭和27）年1月
初出：「博愛　737号」
　1951（昭和26）年1月
※表題は底本では、「お姉《ねえ》ちゃんといわれて」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：酒井裕二
2018年5月27日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

お姉ちゃんといわれて

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/